

遊泳

米満優希

衛星都市のターミナル、から四駅離れると人通りは少ない、山間の商和会の通りから、もう直ぐ九月になる、花屋のある一画で、夏の切り花は長持ちしない、裏道に入る、平屋のアトリエ、自転車が一台停められている、にKはまだ在廊していなかった

「重力は模倣しないことにしました」、キュレーターのTが言い、巨大送風機の涼しい、浮かんでいる数点の油絵、がアトリエの天井を引っ搔いている、がどうか空調を止めないで欲しい

思考法、と題された油絵、以外は前回の売れ残り、は画布の中心にマネキン、が着服している、を描き、その首部には色のない金魚鉢を据えている、のを私は手に取った、親指のネイルが剥がれている、ら絵画の金魚は動き出した

ひ、らり ゆ、らり ふ、らり

煙のように 身を振らせる琉金は

尾鰭を震わせて鏡文字を描く

泳跡はひ、らり ふ、らり

と天体的乃至分子的な軌道で

ひ、らり縫い ゆ、らり縫い ふ、らり縫い

またもや ひ、らり ゆ、らり ふ、らり

壁際で涼むT、さらに涼しいのは壁の中だろう、は上品なけのび、だけなら見ていたい、で接近する、世間話を開始しよう、相互行為の一方的な宣言、とする、「今日はどちらからいらして下さったんですか」、から「ネイル 綺麗な色でお上手ですね」、に至ったところで、「本当に思ってますか」、は昼

食後なら言わずに済んだ、と私は推理して、人は木星上ならずっと誠実、も
油絵の琉金は上下左右に、オフィーリアの真似はしない、奥行きや緩急、泳
いでいる、も自在に、突き放されたような赤の冷たい、泳いでいる